

## メディア日記法を用いた省察とメディア活用の関係

Relationship of Media Utilization and Reflection on Media Activities Using Media Diary Method

後藤 康志  
Yasushi Gotoh新潟大学  
Niigata University

<あらまし> メディアに対する批判的思考は、日常のメディア接触やその背後にあるメディアに対する特性の理解と関連していることから、筆者らはメディア認知の意識化を組み入れたメディアに対する批判的思考育成プログラム開発に取り組んだ。メディア行動の記録に基づく省察について、大学生172人の自由記述データの分析を行った結果として、①学習者は、自らのメディア行動をメディア利用の過多や過小、娯楽目的か教養目的といった点から省察すること、②メディア行動のタイプによって、文字メディアに消極的な学習者ほど自らの文字メディアの接触の不足を指摘するといった具合に省察の内容が異なること、ただしその傾向はそれほど顕著でないことが示唆された。

<キーワード> メディア・リテラシー 批判的思考 メディア日記法

## 1. 背景

メディアからの情報を批判的に捉え、情報がどのような背景で構成されたかを考慮して解釈することはメディア・リテラシーの一部である。批判的思考は道田(2001a, 2001b)によれば、見かけに惑わされず、多面的にとらえ、本質を見抜く態度や技能を指す。バイアスにとらわれず、判断を行っている自分自身をメタ的に引いて見ながら、より正しい判断ができる能力や、そのような行動をしようとする態度である。

メディア・リテラシーにおける批判的思考において、このバイアスの一つに日常のメディア接触や、その背後にあるメディアに対する特性の理解があるのではないか。もしそうであれば、メディア・リテラシーにおける批判的思考育成プログラムは、学習者自身が知らず知らずのうちに生活の中で培っている自分自身のメディア行動(朝、起きたらテレビを付ける、新聞は購読せずネットで済ます、それぞれにどれほどの時間を費やす、といったこと)を振り返ることから始めなくてはならないのではないか、というのが筆者の問題意識である。

坂元によれば「メディアを批判的にみて、これに対抗する能力を育成する」ということ

は、「メディア特性の理解力」と「批判力」がセットになっているという(坂元 1986)。山内は、クリティカルなメディア理解の観点としてメディア特性の理解を挙げている(山内 2003)。宮田(2001)は、情報収集においてはメディアの特性を理解し選択し情報を収集することが必要となるので、「どこにどのような情報があるのか」、「情報とはどのように評価するのか、活用できそうなのか」、「信じられる情報とはどういう情報か」といった知識についての知識、つまりメタ知識を持つことが重要であると指摘する。

連合王国 DCMS (文化・メディア・スポーツ省) は 2001 年「メディア・リテラシーについての声明」の中で批判的な見方 (Critical Viewing Skills) の要素の一つとして「メディア利用についての正当性の説明」を挙げている。DCMS の声明によれば「メディア利用について、自分自身のメディアの選択や利用について、なぜそのメディアを活用したのかを、メディアの特性を踏まえて合理的に説明できること」が、批判的思考の一部である (DCMS 2001)。

こうしたメディア特性の理解は経験と深く結びついている。例えば、インターネットの利用経験が豊富になればなるほど、インター

ネットを好み、同時に難しさについても気づいていくといった具合に、メディア特性の理解が明瞭になる(後藤・生田 1999, Ikuta and Gotoh 2001). 構造方程式モデリングを用いた検討によれば、主体的態度が高まればメディア操作スキルが高まり、メディア操作スキルと主体的態度がメディア特性の理解に影響を及ぼし、メディア特性の理解がメディアに対する批判的思考に影響を及ぼす、という関係が示唆されている。(後藤 2006) .

このような問題意識の元、学習者が自らのメディア行動を記録し、自らのメディア行動をいかに省察したのかについて検討した (Gotoh, Ikuta & Kurokami 2010) . 結果として、学習者は映像メディア、映像・電子メディアを多様に活用していることが示唆された。また、後藤(2010)では、省察の自由記述をコーレスポネンダ分析を用いて分析し、メディア日記に対する省察を行うことにより、学習者は自らのメディア行動を改善しようとする事、メディア行動の改善は、活字メディアに対しては接触不足の指摘は多いが、映像・電子メディアに対しては必ずしも過多に限らず、多様であることが示唆された。

このようなメディア行動の省察についてはよく分かっていないため、その評価は自由記述によっているが、実践を蓄積することでどのような省察が成り立ちうるかの知見が蓄積されれば、項目化して自己評価のためのチェックリスト化することが可能となろう。筆者が行っているような実践を手軽に行えるようにするためには自由記述の内容を精査していく必要がある。

また、この分析では学習者の多様なメディア経験については触れていない。例えば活字メディアに対する接触が少なく、改善が必要な学生ほど、自らの活字メディアの利用について深く省察するといったことが期待される。学習者のメディア経験によって、メディア行動の省察がどのように異なるのかを明らかにすることが、メディア・リテラシー育成プログラムの開発のために必要である。

iPad のような活字メディアであり電子メディアでもあるメディアが普及してくる事により本研究の枠組みの見直しが迫られる可

能性もあるが、当面、活字メディアと映像・電子メディアという枠組みで検討する。

## 2. 目的

本研究の目的は次の2点である。

- ① メディア行動の記録の省察によって、学習者が自らのメディア行動のどの点を省察するのかを明らかにする。
- ② メディア行動のタイプによって、メディア行動の省察に差はあるのかを明らかにする。

## 3. 方法

### 3.1. 対象及び実施時期

対象は N 大学「メディア論」受講生 172 名を対象とした。

「メディア論」では地方紙と全国紙の比較、新聞とテレビの報道内容の比較、CM 分析、テレビ番組分析、Wikipedia と印刷メディアの比較などを取り扱い、2009 年 10 月から 2010 年 2 月まで 15 回の講義を行った。

メディア日記と省察の実施時期は 2010 年 2 月の 1 週間であった。この期間は試験期間の前であり、このことが結果に影響を及ぼしている可能性があるが、この点は課題で触れる。

### 3.2. メディア行動の自己評価、記録、省察

研究の枠組みは図 1. に示す。

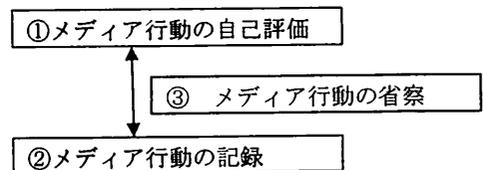


図 1 研究の策組み

#### ① メディア行動の自己評価

省察を行うためのベースとして、メディア行動の自己評価を行わせた。具体的にはテレビ、新聞、インターネットなどのメディアに対して自分がどれくらい利用しているか(ほぼ毎日、週に 2, 3 回、月に 2, 3 回、年に 2, 3 回、ほとんど使わないなど)自己評価するものである。プログラムの計画当初、この自己評価とメディア記録を比較させることを予定してい

たが、メディア日記の実施がずれこんだため、比較は行わなかった。

### ② メディア日記への記録

次に、学生に「どのようなメディアを、どのくらいの長さ(分)で、どのような目的で利用したか」を毎日記録することを求めた(資料)。これを「メディア日記」と呼んでいる。

メディア活動としては次の活動について問うた。

表 1. メディア活動

(活字メディア)	
●	図書
●	新聞
●	雑誌
●	その他活字
(映像メディア)	
●	テレビ
●	ワンセグ
●	BS
●	CS
●	DVD
●	その他映像 (Youtube, ニコニコ動画)
(電子メディア)	
●	インターネット
●	ブログ
●	メーリングリスト
●	SNS
●	メール

24 時間を全て対象としたので、授業時間も含まれることになるが、自発的な読書と区別するために教科書を読んだ場合は「その他活字」とし、自発的な読書のみを「図書」としてもらった。

同時に、以下のメディア利用の目的を問うた。

表 2. 目的

●	教養
●	学習
●	娯楽
●	交流
●	ながら (同時利用)

「ながら」については、例えば「テレビを見ながらインターネットで調べ物をする」という場合はインターネットは「教養」、テレビは「ながら」とするように依頼した。日記なので

まとめて書かないように、一日の内に就寝前など時間を決めて付けるよう依頼した。

### ③ メディア行動の省察

メディア日記の記録に基づいて、自分のメディア行動のよい点、改善すべき点について自由記述するように求めた。自由記述の提出はメールによって行った。

## 3.3. 分析

### ① 記述内容のカテゴリー化と頻度

対象となる 172 名分の自由記述の全文を読み、内容のラベルを付けた。この作業を 3 回繰り返しラベルを均一化した。次に、SPSS Text Analytics for Surveys を用いて類似するラベルを統合し 21 のカテゴリーを抽出した。

### ② メディア行動による被験者のタイプによる記述内容の検出

文字メディアと電子・映像メディアに対するタイプ分けのために、メディア日記の接触到総和を計算し、4 群に分けた。活字メディアについては、図書、新聞、雑誌、その他活字の「どのくらいの長さ(分)」を、電子・映像メディアについてテレビ、ワンセグ、BS、CS、DVD、その他映像 (ユーチューブ、ニコニコ動画)、インターネット、ブログ、メーリングリスト、SNS、メールを合計し、中間値で 2 分して被験者を 4 タイプに分類した(表 3)。

表 3 メディア行動によるタイプ

		電子・映像	
		接触大	接触小
文字	接触大	HH 群	HL 群
	接触小	LH 群	LL 群

このタイプを用いて記述の有無によるカイ二乗検定及び残差分析を行った。

## 4. 結果

### 4.1. 記述内容のカテゴリーの頻度

記述内容のカテゴリーと頻度を表 4 に示す。表中、過大評価とあるのは「日記法をやってみたら思ったほどそのメディア行動をとっていなかった」場合であり、過小評価とあるのは「日記法をやってみたら思ったよりそのメデ

「メディア行動をとっていた」場合を指す。過小とあるのは事前の予測と関係なく「そのメディア行動をあまりとっていない」、過大は事前の予測と関係なく「そのメディア行動を頻繁にとっている」ことを指す。

次にメディア毎に見ていく（○数字は表④の「記述内容のカテゴリーと対応」。活字メディアでは新聞、図書を読まない反省が多い①、②。新聞についてはアパートで新聞を購読しておらず、⑩ネットや携帯で代替していることに気づいた者もいる。

映像では、④テレビを思ったより見ており、⑤教養目的で見る者もいるが、⑦もっと教養目的でみるべきと思う者もいる。一方、⑩思ったほどテレビを見ていなかったことに気づいた者もいる。

電子メディアではネットと携帯で差があり、⑭携帯は思っていたより使っていると感じた者が多いが、⑨ネットは思ったより使っていると感じた者だけではなく、⑩思ったより使っていないと感じた者もいる。⑩ネットや携帯による新聞の代替、⑫ネットによる最新情報の獲得、⑬ネットによるテレビの代替（この学生はアパートにテレビがない）など、活字メディアや映像メディアを補完するために電子メディアを用いていることに気づいた者もいた。

メディア全般で見ると、大半の学生は⑩思ったよりメディア活動を多く行っていると感じ、しかも⑰娯楽用途、⑱ながら利用が多いと思っている。それだけでなく一部ではあるが朝テレビのニュースを見る、など⑳利用時間が習慣化していることへの気づきや、㉑用いているメディアが偏っていることへの反省を記述した学生もいる。

表 4. 記述内容の頻度（数値は度数）

メディア	記述内容のカテゴリー	度数
活字	①新聞過小	80
	②図書過小	56
	③新聞教養購読	10
映像	④テレビ過小評価	60
	⑤テレビ教養視聴	16
	⑥テレビ過大評価	10

	⑦テレビ教養視聴必要	8
	⑧テレビ娯楽視聴	5
電子 (ネット)	⑨ネット過小評価	17
	⑩ネット過大評価	13
	⑪ネットによる新聞代替	10
	⑫ネット最新情報	6
	⑬ネットによるテレビ代替	2
電子 (携帯)	⑭携帯過小評価	34
	⑮携帯過大評価	4
メディア 全般	⑯メディア過小評価	53
	⑰メディア娯楽過多	39
	⑱ながら過小評価	34
	⑲メディア過大評価	20
	⑳利用時間の習慣化	13
	㉑メディア利用不均衡	13

#### 4.2. メディア行動のタイプによる記述の比較

各群の人数及び接触平均時間を示す。H H群(45名)は文字接触平均 1657 分/週・電子映像接触平均 3375 分/週、H L群(41名)は文字接触平均 1662 分/週・電子映像接触平均 1077 分/週、L H群(41名)は文字接触平均 36 分/週・電子映像接触平均 3457 分/週、L L群(45名)は文字接触平均 21 分/週・電子映像接触平均 915 分/週であった。カイ二乗検定の結果が有意傾向(10%)、5%水準で有意、1%水準で有意な項目について、調整済み残差が 1.96 を超えるものを書き出したのが表 5 である。

群毎に見ていく。文字メディアにも電子・映像メディアにも積極的とは言えない LL群は、他の群に比べて新聞を読む頻度が低いことについて多く記述する傾向がある。また、自らのメディア行動を過大評価しており、思ったほどメディアを使っていないことを他の群より多く記述する傾向がある。

次に、文字メディアには積極的ではないが、電子・映像メディアに積極的な LH群については、ネットの過小評価に気づく傾向があり、思ったよりネットを利用する頻度が高いことを他の群に比べて多く記述する傾向がある。

次に、文字メディアに積極的であるが、電子・映像メディアには消極的な HL群について、他の群よりも新聞を読む機会が少ないこ

とを記述しない傾向にあり、同様に図書について機会が少ないと記述しない傾向にある。また、テレビの過小評価も少なく、思ったよりテレビをよく見ている、という記述をする傾向が、他の群に比べて低い。

最後に、文字メディアにもよく接触し、電子・映像メディアにも頻繁に触れる HH 群について、テレビの過小評価が高く、思ったよりテレビをよく見ている、という記述をする傾向が、他の群に比べて高い。

表 5. メディア行動のタイプと記述の頻度 (数値は調整済み残差)

	カテゴリー	III	III	LII	LL
活 字	新聞過小**		-2.5		3.2
	図書過小†		-2.6		
	新聞教養購読				
映 像	テレビ過小評価*	2.3	-2.4		
	テレビ教養視聴				
	テレビ過大評価				
	テレビ教養視聴				
ネ ッ ト	ネット過小評価*			3.0	
	ネット過大評価				
	ネット新聞代替				
	ネット最新情報				
	ネットテレビ代替				
携 帯	携帯過小評価				
	携帯過大評価				
メ デ ィ ア	メディア過小評価				
	メディア娯楽過多				
	ながら過小評価				
全 般	メディア過大評価†				2.6
	利用時間の習慣化				
	メディア利用不均衡				

† p<.10, \* p<.05, \*\* p<.01

## 5. 考察

メディア日記法によって活字メディアでは新聞、図書の接触の不足、映像では、テレビ視聴の過多、教養目的での視聴不足、携帯やネット利用の過多、娯楽用途でのメディア利用の

過多について気づくことが示唆された。教育プログラムの開発に向けては自己評価のためのチェックリストが作成されると有用であると考えるが、今回、得られたカテゴリーに加えて、教育的に必要と思われる内容を加えたチェックリストの試案を作成し、実践を行いたい。

次に、メディア接触のタイプによってこの省察がどのように異なるかについて、文字メディアにも電子・映像メディアにも積極的とは言えない LL 群は、他の群に比べて新聞を読む頻度が低く、自らのメディア行動を過大評価しており、思ったほどメディアを使っていないことを他の群より多く記述する傾向があるといった具合に、項目によっては特徴があることが示唆された。

ただし表 5 を見て分かるように、メディア行動のタイプによって省察の内容はそれほど明瞭に特徴付けられるほど異なるわけではなかった。この手法では自分の弱点に気づきにくいのではないかと、いう可能性もある。この点、実践を重ねながらさらなる検証が必要であろう。

今回、メディア行動のタイプを実際にメディアを利用したと報告した時間 (分) によって行ったが、期間が 1 週間であったこと、テスト期間に近かったために通常のメディア行動とは異なるなど、結果にバイアスがかかっている可能性がある。今後、期間延長や時期多様化などを工夫しつつ、データを収集していきたい。

## 6. 参考文献

- Department for Culture, Media and Sport  
(2001) Media Literacy Statement: 2001.  
A General Statement of Policy by the  
Department for Culture, Media and  
Sport on Media Literacy and Critical  
Viewing Skills.  
[http://www.culture.gov.uk/PDF/media\\_lit\\_2001.pdf](http://www.culture.gov.uk/PDF/media_lit_2001.pdf)
- 後藤康志(2010) メディア行動の記録に基づく示唆の分析. 日本教育実践学会研究会論文集 13.99-100
- 後藤康志(2006) メディア・リテラシーの発達

と構造に関する研究.新潟大学提出博士  
学位論文

後藤康志・生田孝至 (1999a) 受信・発信メディアに対する児童の先有知覚に関する研究. 日本教育工学会誌/日本教育工学雑誌, 23:85-88

Gotoh, Y., Ikuta, T. & Kurokami, H. (2010) Development of Media Diary Method: As a Reflection Tool for Media Utilization. Proceedings of International Conference for Media in Education 2010, 27-32

Ikuta, T. & Gotoh, Y. (2001) A study of Children's Preconceptions to Communication Media. *Paper Presented at the Annual Conference of the British Educational Research Association 2001*, University of Leeds, England

道田泰司 (2001a) メディア・リテラシーから教育リテラシーへ—教育における批判的思考—. 初等教育資料, 738:68-71

道田泰司 (2001b) 日常的題材に対する大学生の批判的思考—態度と能力の学年差と専攻差—. 教育心理学研究, 49:41-49

宮田加久子 (2001) 情報ネットワーク社会に求められるメディア・リテラシー. 明治学院論叢, 658:1-35

坂元昂 (1986) メディアリテラシー. 後藤和彦・坂元昂・高桑康雄・平沢茂(編) メディア教育を拓く—メディア教育のすすめ  
①. ぎょうせい.

山内祐平 (2003a) デジタル社会のリテラシー—「学びのコミュニティ」をデザインする. 岩波書店.

月 日	0:00	1:00	2:00	4:00	5:00	6:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	主な目的(複数可)
図書												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
新聞							20					①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
雑誌												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
その他活字												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
テレビ												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
携帯ワンセグ								10				①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
BS										60	60	①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
CS												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
DVD												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
その他映像												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
Web										60	60	①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
ブログ												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
メール(携帯含む)												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
その他Web												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
個人用オーディオ												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )
ラジオ												①教養, ②学業, ③娯楽, ④交流, ⑤表現, ⑥ながら, ⑦( )

資料 メディア日記 (実際は 24 時間)